土曜 ライフ・楽しむ

活用自在 廃校に吹く新たな風

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」
編集長・真鍋康利さん

風の音に交じってどこからか子供たちの元気な声が聞こえてくる気がします。ここは倶知安町の旧寒別小学校。年季の入った木造建物で、私が通った学校とはまるで似ていないのに、なぜか懐かしく、いつ来てもホッとします。

1990年に京都から移住した陶芸家林雅治さんが家族で運営するFAF工房（フロンティア・アート・ファーム）は、廃校再利用の草分けの一つで、校舎を住居、ギャラリー、工房、陶芸と羊毛加工の体験場に分けて活用しています。元校長室のギャラリーから見える羊蹄山は絶景で、校庭を歩く羊が北海道らしい風景を際立たせています。羊の世話をする林さんは陶芸の上手な羊飼いといった風情です。

コロナの影響で4月から休んでいた体験教室を、夏以降十分な感染防止対策を講じて再開。本州への移動が困難な修学旅行生らが作陶に取り組みました。古い建屋は、もともと隙間風がよく通る構造なので、換気は問題なかったのではないでしょうか。

○　○　○

全国的に学校の統廃合が進む中で、北海道は全国で最も廃校件数が多いそうです。一次産業の衰退、炭鉱の閉鎖などで過疎化が進み、少子化もあって地方の人口が減り続けていることや市町村合併も要因かもしれません。卒業生には残念なことですが、廃校と同時に解体された校舎も少なくありません。

しかし一方で旧校舎を再利用しようという動きも始まりました。古い校舎を維持しながら、新たな地域の活動拠点としてよみがえらせ、地域おこしの核になっている例もあります。こうした再利用の試みは、何かシニアのセカンドライフに重なりますね。

○　○　○

古い校舎を再利用するメリットの一つは土地の広さ。大小はあるもののグラウンドや校庭など屋外空間が広く、自由度が高いため、さまざまな活用方法が考えられます。昭和25年以降の校舎は床から天井まで3㍍の高さが確保されており、屋内空間もたっぷりあります。また、校舎そのものも一般の建物より丈夫に作られており、体育館や講堂などはさらに重さに耐えられるように作られています。

そのため再利用の用途は、博物館、美術館などの文化施設、合宿所やユースホステルなどの宿泊施設、モノづくりやクラブ活動などを楽しむ体験施設、保育施設など多岐にわたります。広さの優位性から木工芸や家具製作などの工場も目立ちます。

その中心にいらっしゃるのは道外から移住してきた方が多く、ほとんどがちょっと風変わりで、魅力的な人が多いような気がします。